

二次元ぷち文庫

試し読み版



血弾の
メロディ

狩野景

表紙イラスト：明地雷

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『血弾のナスターシア』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



血弾の メロディ

狩野景

表紙 / 明地雷

二次元ぷち文庫

登場人物紹介

Characters

ナスターシア

吸血鬼ストリゴイを討伐する組織のマエストロと呼ばれる処女戦士。

バーンスタイン

性交によって人間の生体エネルギーを喰らい死に至らしめる吸血鬼ストリゴイ。

ガースト

バーンスタインに召還された魔獣。

冷気に満ちた地下共同墓地の闇を、漆黒の影が征く。

あどけなさの残る華奢な身体を、白のフリルで縁取られた黒いワンピースに包む少女。肩ひもを首に結んだホルターネックが、華奢な肩口から背中までを大胆に晒す。深く切り込んだ胸元には、腕を伏せたように美麗な乳房が肉感的な谷間を覗かせていた。

黒揚羽のリボンでツインテールに結ばれた豪華な金髪が、優雅に縦ロールを揺らす。不機嫌に結ぶ紅の唇。新雪のように白く透き通る彫り深い美貌に眉根を吊り上げ、碧眼が射殺すような眼差しを真つ直ぐと見据えている。

「まったく、こんな辛氣くさいところに隠れてるなんてっ！」

微かひくさい空氣に形良く通った鼻を行儀悪く鳴らし、張りのある声で悪態を吐く。荒々しく大股で突き進むが、漆黒のオーバーニーソックスに包んだ長い足が履く頑丈なアサルトブーツは、わずかな足音すら立てぬ。

「ぐふああああうううううっ!!」

と、その時、不自然に掠れた呻きをあげて、身体の至る所が腐り崩れた屍喰鬼が鋭く尖った爪を振りかざし襲いかかってきた。

「グールか……ふん、雑魚がっ！」

しかし黒衣の少女は面倒な用事を片づけるような口ぶりで呟くと、指先を露出させた手袋と一体化したセパレート袖に包むしなやかな腕で、フリルが縁取るミニスカートを跳ね

上げた。

淡いピンクのショーツが丸見えになるが、恥じらう素振りもない。無駄な肉のない太腿に、太いベルトで留められた大型ホルスター。そこから目にもとまらぬ速度で、黒光りする無骨な鉄塊のように巨大な拳銃ゴライアスが引き抜かれた。

——ドゴオオオオオッ!!　ズガアアアッ!　ドガガガガア——ンッ!!

刹那、壮絶な連射が二丁の巨銃から繰り出された。凄まじい反動が生じているはずなのだ、狙い定める少女の細腕は少しも揺るがぬ。無駄のない動作で次々に標的を捕捉し、撃つ、撃つ、撃つ!

「数ばっかりで、弱すぎっ!!　遊びにもならないっ!」

銃弾を撃ち尽くすと、少女は細いウェストに回したレースのガンベルトから、新たなカートリッジを装填し間髪入れず発砲を再開する。

命中した途端に弾丸は、その内部に詰められた邪悪な存在を討ち滅ぼす処女の聖血をぶちまけ、夥しい数の屍食鬼を再びの永遠の眠りへと葬り返した。

「——こんな子供騙しで対抗しようだなんて魔術師の異名が泣くわよ、バーンスタイン!!　アタシはグリーンスリーヴスのマエストロ、ナスターシア!　覚悟しなさい、薄汚いストリゴイ!!」

左の腕に巻かれた緑の腕章。人を陵辱し絶頂に至らしめると共に生命力を奪い取る怪物、

7

ストリゴイを討伐するため組織された機関グリーンスリーブス。

彼女、ナスターシアは、唯一処女の血液によって滅びるその敵と戦うため生み出された、マエストロと呼ばれる清純なる戦士であった。

無数の敵を葬って、息一つ乱さず堂々と立つ小柄な少女。その碧眼が睨む床に深紅の魔法陣が描かれてた。その呪文を綴る円は、颯り殺され無惨な肉塊と化した老若男女、数十人からの亡骸で構築されている。

(くっ……惨いことをっ！ 許せないっ!!)

惨状に小さく呻く。不機嫌が燃えるような怒りへと姿を変えてゆき、少女の心を掻き立てる。

そして円図の中央に不気味な腐肉色の触手に守られ、血走った目のみすばらしい瘦身が立つ。

「まったく、執念深いガキだな。あちこち逃げ回ったおかげでボクの研究が予定より七十日も遅れてしまった。だがほら、やっと魔界から召還できたよ……キシキシキシ！」

食人鬼でありながら人を食らうよりも、怪しげな魔術の研究に情熱を注ぐ。その忌まわしい実験の成果が不気味な触手の怪物であった。

「罪もない人たちにこんな扱いをしてっ!!」

邪悪な魔導士を睨みつけ、両手を前へと掲げて水平に倒した銃身を向ける。

——ズゴアアアアアアアアンツ!!

哀れな人々を弄ぶ者への怒りを込めた銃弾を、地下空間を震わせる銃声の轟きとともに放つ。だが——。

ガギイ——ンツ!

「——!! な、なにつ!!? そ、そんな……。くそっ!」

硬質的な音色を響かせ、不死者の強靱な肉体をも貫く強力な銃弾が、敵を取り囲む触手の寸前で弾かれる。

「見たか、高速で飛来する脅威をすべて遮る絶対防壁、彼方の世界より呼び寄せた妖魔、ガーストの力を!」

バーンスタインが得意げに陰鬱な声を響かせる。召還者を守るように、腐敗したように黒ずんだ肉色の触手は、ぐねぐねと蠢きながらナスターシアへと迫った。

(高速攻撃……弾丸を弾くつ!! 相性最悪だわっ!)

先端に口を開き鋭く細かい歯をギチギチと咬み合わせて、前方と側面から同時に来る。ギリギリまで引きつけ、腕を十字に交差させ連続で弾丸を叩き込む。だが至近距離にも関わらず、瞬時に展開した防壁が必殺の滅撃をまたしても無効化してしまった。

「このお、鬱陶しい化け物があっ!」

屈辱に歯がみしながら、触手が全方向から繰り出す攻撃を避け、無効と知りつつ弾丸を

乱射する。

——ガヂッ!!

その重い銃声が、突如乾いた鉄の響きに変わった。

「ああっ……!! し、しまったっ!」

新人の頃以来の初歩的なミスだった。窮地への対処法を考えることに必死で、残弾を確認もせず二丁とも無駄に撃ち尽くしてしまったのだ。

じゅぶるっ!!

「ひうっ!! く、くそ……ッ!」

ほんの一瞬で腐った肉色の触手に手足を絡め取られた。動物の腸を思わせる歪な管は、細かく硬い毛がびっしり生えて少女の柔肌にチクチクと食い込む。

ぶよぶよと伸縮する肉が冷たい黄ばみ汁を滲ませ、手袋を兼ねる袖や、誇り高き戦士の証である緑の腕章に染み込みべつとりと肌に貼りつく。

(や、やだっ! なにこれっ!! この、汚いのっ!!)

両脚も同じく、足首から這い登る肉鳶が、にちよ、ぬちや、と太腿にまで粘液のしずくをこびりつかせ、オーバーニーソックスをじつとり濡らしながら柔肌を撫で擦る。

「——ぎいう……こ、こん……な……」

おぞましさに耐え、ナスターシアは触手をふりほどこうと手足に渾身の力を込めた。

よっぱさを舌に刻む。

そして、手足を拘束し身体中を這い回る細い蔦の先からも、同時に濃白濁の汁流が噎せ返る腐敗臭とともに降り注いだ。

——ぶつやあああああつ！　ぴじやあああつ！！　べじゅつ！！　ぶべばばばじゃあつ！
（なんなのお、これえ!?　やだあ、中あ、染みこんできちや……ううつ!!）

こつてりとした濃厚な液塊が全身にへばりつき、汚れた筋を白肌に刻む。ガーストの触手精液は膣内でも襞の隙間から染み入り、快樂に脈打つ子宮へと潜り込む。身体の内と外から犯される感覚に突き上げた尻をくねらせ、口中の男根にしやぶりつく。

おぞましさと快感に揺さぶられるナスターシアに、怪人の唇が意地悪く歪んだ。

「ガーストもお前の淫乱な身体が気に入ったらしい。随分とたっぷりぶちまけてもらって、嬉しいだろう？　あと数日もすれば、その精液、その子宮内で育って、立派な妖魔として産まれでる。くつくつく、楽しみだな！」

「な、なんれ……すつてへえっ！　——い……いい、いやああああつ!!」

告げられたそばから、身体の中でのなが存在を増してくる。射精と同時に孕まされた衝撃に、ナスターシアは白濁をべつとりこびりつかせた金髪を振り乱し、狂わんばかりの悲鳴を迸らせた。

胎内に巣くう者を追い出そうと必死に力むが、余分となった液汁が生々しい音を響かせ、

ぶじゃあつ！　べびゅぶつ！！　と嘔き出すだけ。怪物の嬰兒は完全に子宮に居座り、彼女を母胎として育ちつつあった。

「お願ふあいつ！！　ふおんなのやらつ！　ふおんなの産みはくなひつ！！　助けふえつ、變なの孕まふえないれええつ！」

凜々しさと可愛らしさの同居した顔をもつともなく歪ませ、威勢よい言葉を紡いでいた口で懇願する。

「おいおい、酷い母親だなつ！　楽しむだけ楽しんでおいて、出来ちゃったら産みたくないななんてっ！！」

必死の願いをせせら笑い、バースタインは彼女の口中からペニスを引き抜いた。たつぷりと口内射精された白濁液が、だらだらと形良い唇から垂れ落ちる。

それでも男の物で喉を塞がれていた息苦しきから解放され、大きく息を吐いたその時、再び触手が少女の体勢を変えさせた。いままでの姿勢から百八十度回転させられた、仰向けで股間をストリゴイへと捧げ出す、屈辱的な状態に。そして、膣穴を満たしていた触手怒張が、アナルの銃とともに引き抜かれる。

「ひううっ！！　あ、ああはあ……ッ！」

極太が抜け出る感触が両穴を震わせ、息を詰まらせて全身を痙攣させる。その姿をせせら笑いながら、バースタインは息がかかるほどに顔を近づけてきた。

「ふん、汚らわしい破瓜の血はもう大丈夫のようだな。——しかし、すっかりと味を占めたようだな。よほどガーストの物はよかったか？」

溢れかえった液濁に清められた陰部を覗き込み確認する。いままでくわえこんでいた極太を名残惜しむように口を広げ、充血した紅色の花弁を震わせ雫を溢れさせるその様に、勝ち誇ったように問いかける。

「ひうつ！　ち、違あ……んうつ!!　で、でも……っ！　ああ、いやっ、変なお腹にい……」

胎内に宿った異質を嫌悪しながらも、前後の敏感穴を満たしていた物が失せた喪失感に惑う。間近に掲げられる物を、飢え乾いた眼差しで凝視してしまった。ついさっきまで口腔にのさばり舌奉仕を強いていた、自分の唾液でべつとりと濡れた凶悪な大きさの男根。生白い幹を隆々と怒張させた牡肉の偉容に、ヴァギナがキュンと窄まる。

「そうだっ!!　お前の子宮へ宿ったモノに、さらにボクの遺伝子を加えてみよう!　どんな素晴らしい存在が産まれてくるか、ワクワクするじゃないかっ!!　君もそう思うだろ!？」

ふと思いついたらしく、おぞましいアイデアを興奮して叫ぶ。興味を持ったからには、すぐに実行せずにはいられないとばかりに、ストリゴイは脈打ち蠢く膣口へせっかちに怒張を押し挿れた。

「ひゃあつ、ふつはわあああああつ！ 挿いっ……ちやつたあああつ！！」

濡穴から跳ね上がった悦撃に火花が散った。

ぶずぶずぶつ！ と穴壁が押し広げられ、蜜が絞り出される。絡みつく襞を容赦なく振り解かれると、腰が砕けそうな快感に思考が止まる。

触手のようにうねって自在に襞壁を捏ね拉げたりはしない。だがとてつもなく硬く太く長い。それだけでナスターシアが駄目になつてしまった。

（ふああつ！！ すごいっ！ 変なの孕まされてるのにいつ！！ あああつ、こんな……気持ちイイッ！）

男が内に挿入ってくる感触に、碧眼を潤ませ金の髪を振り乱し悶える。膣穴の快樂をうらやみ脈打つ菊門にも、触手怒張が入り込み腸襞を掻き刮げた。

さらには細い触手の先端に包皮をはだけて屹立したクリトリスをくわえ込まれ、細かく生えた鋭い歯で噛み転がされる。

（ひあああつ！ 飛んじやうッ！！ 強すぎッッッ、だめえ——ッ！）

脳裏を乱打される過剰な激感に声も出せず、息を詰まらせ両脚を激しく痙攣させた。

さつきまでその肛門にぶち込まれていた銃口を唇に押し入れられ、尻液の苦塩辛い味わいが舌に広がる。

「くふおあつ！ ふもおおつ！！ ふあぐうう……」

呻き声をこぼし朦朧と愛銃をしゃぶるなか、空撃ちの衝撃に頭蓋を揺さぶられ、引きつった笑みで涎を滴らせる。

「素晴らしい締めつけだぞっ！ こ、こんなに、ボクのペニスをつっ!! こんな名器を持っているながら処女を守っていたなんて、実に馬鹿者だな、君はッ！」

剛直に突き上げられ窪む子宮の内側で、全身を這い回る触手と同様の感覚が生まれ大きさを増してきた。

「ひあああつ！ なにこええ、お、お腹ああつ、変なのがつ!! はうあああつ、へ、変なの、イイツ！ ふくあああつ、イイイイイのおおおッ!!」

身体の外と中から触手に擦られ快楽の狂乱が牝体を揺さぶる。胎内に息づいたガーストの胎児は信じがたい速度で成長を続け、いまやナスターシアの腹は臨月の妊婦みたいに膨らんでいた。

枝分かれし指のようになった肉蔦に乳房が揉み捏ねられている。その硬く勃起強張った紅乳首から、濃厚な母乳が飛沫を散らす。

「はわあと、お、お乳い、れちやつはあつ！ やらああああつ!!」

望まぬ身体の変化に涙をこぼして頭を振る。しかし母乳が溢れるたびに、ジンジンと疼く乳首の熱さが後を引く。

「ふははっ、もうすっかり育児の準備が整ったようだな」

肉蔓の巻きつく美房を濡らした清らかな白い乳液を舐めて、満足したようにバーンスタインが頷く。そして彼は、触手と少女の細腰を抱え込むとつんのめるように全力のストロークを繰り返した。

——ズバンッ！ パブンッ！！ スバンッ！ ブジャッ！！ ペパアアアンッ！ ビュドオオンッ！！

早く激しくなる抽送音に、膣から吹き出す愛液の靡響が混じる。

「ひいっ！ あああっ！！ はあひっっ！ ふああ、つ、強ッ！！ くっ……アハアアッ！ ふあああつ、お、お腹あつ！！ は、弾けッ、ちゃ……ふひあああああつ！」

一突きごとに剛直は太くなり、自分の膣穴は狭く縮んで感度を増大させる。絡みつく壁をふんだんなヌメリで逆撫でされながら、孕んだ触手で肥大していく蜜壺を連打され、危うい歓喜が膨張した。

「はわあああああつ！ く、くるっ！！ なにか……あああああつ！ と、飛んじやうつ、おかしくなつちやううっ！！ やあつ、イクッ、イツちやうつ！ つあああ——っ！！」

絶頂の激震に拘束された身を暴れさせる。

脳裏が真っ白に染まり、意識を遙かな彼方まで打ち上げられたようだ。それでいて肉体を掻き乱す悦楽は、さらに濃度を増し続けている。

「ボ、ボクの遺伝子だっ！！ 受け取れッッ！」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>